

よぬだ とこざどころ



第二十四号

ヨナダーが下米田・牧野の色々な見どころを紹介するよ

信友の地名とその謎

ノブトモという地名とともに

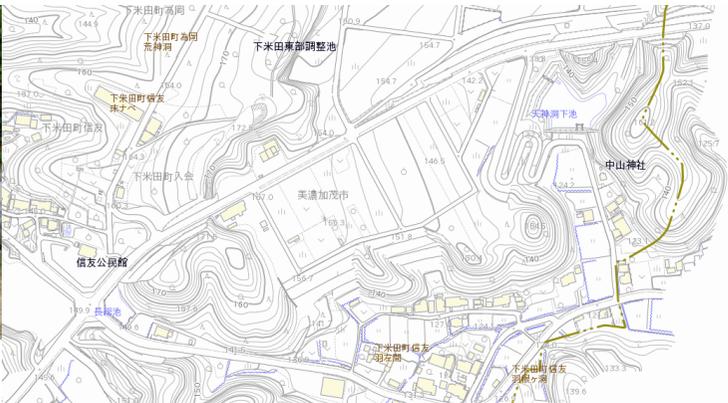
人名が地名につけられる代表例が名田百姓村や新田である。牧野地区の「与次郎」や「助七」がその例であるが、この信友は名田や新田の形にあてはまらない。美濃加茂市史などは、名が当てられたとしているだけで、その名の内容がない。信友の集落は洞の出入り口と洞の中の斜面に多く、隣り合う山本の集落とその立地がよく似ているが、西脇や為岡・則光とは少し違っている。信友の主集落は洞の北斜面に多く、南からの日光がよく当たる日向である。各家の周りは小規模な畠がみられ、野菜などは自給できるようである。

洞の出口は鎮守で守られ、東へ山越えをしたところに中山がある。中山は市町村境界で二つに分けられ、信友に近い中山を信友中山といい、和知に属する中山と区分している。

さて、信友は幕藩体制の下では今尾領であったため、濃州徇行記には掲載されていない。ただ、明治維新後今尾藩から廃藩置県で県になったときの調書に寺社の記載がされており、その中に注目できる記述がある。

「**中山神社は加茂郡米田庄信友村に座して中山天神と称す云々。**」また、「**一人の鍛冶有り。名に信友と云ふ。中山の金神に誓ひ太刀を打事のくわしき業をなせりより村名にせり**」と。

すなわち、鍛冶職人の名前が村名の起源とする記述である。鍛冶職といっても鍛冶は一人でおこなうものではなく、「信友」という頭領の支配下の家族・下人を含めての集団である。当然一村の形式



を有し、周辺の山林の支配者の庇護の下に鍛冶職をおこなっていたと推察できる。当時の鉄の鍛造は「たたら」形式であり、大量の燃料としての木炭が必要である。集落成立当時の環境がしのばれる。写真は中山神社